

【発達障がいは発達する～スケジュール編～】

A子さんのスケジュールは、日を追って詳しくなり、一日十数枚の写真カードが必要となった。スケジュールに無いことが起こると決まってパニックなる彼女のニーズに合わせた結果だった。彼女のいつも座っている玄関のわきのスケジュールボードは、縦一列の写真カードが、背の高さを越えるほどになっていった。そして、午後になれば次の日のスケジュールが気になる彼女のニーズに合わせる形で、最後には、今日、明日の縦2本のスケジュールが必要になった。

それが20年前のこと。

そして、10年ほど前から、ポツンポツンと写真カードの枚数は減り始め、今では、彼女のスケジュールボードには、一日分、5～6枚の写真カードがあるに過ぎない。現在の彼女の大きなニーズであるポテのところに行く（事業所で飼っている犬のところ）が午前中に入り、午後のおやつ時間にアイスクリームの写真カードが組み込まれているのがスケジュールの中心である。

B子さん、毎日、夜勤の職員に次の日の出勤職員や日課や予定を組み込んだスケジュールをA4の用紙にプリントアウトしてもらい、それを大切に持ち歩いたものだ。それでも出勤予定職員の名前を大声で「〇〇さんは～！」と叫んでみたりと、スケジュールがあれば、すっかり穏やかな気持ちで毎日を過ごすことができるというわけにもいかなかったのだが、10年も経ったころから、そのA4の用紙をあちらに置き忘れ、こちらに置き忘れということが生じて、その後、日間のスケジュールが必要なのは、行事日のような格別イレギュラーが強い日だけになっている。もちろん月間の予定はカレンダーに写真等で掲示されていて、情報量はどうもそれで十分のようなのだ。

30年前の彼女は、予定された退庁時間を過ぎると早番の職員や遅番の職員を大声（〇〇さん、帰りますね～！）と背中を押す直接行使で、決まった時間を守り通すことをしなければ不安が高じてしまう人だったのに…。

C男さん、彼は、家庭の事情で、一年

に2回しか帰省ができない人だった。一ヶ月のカレンダーでは、もちろん帰省の掲示は貼れないので、帰省の掲示を貼るのには、半年先までのカレンダーが必要だった。彼は、帰省を示す父と母と自分とが実家の玄関先に立っている写真がないと安眠ができなかったから、職員は、居室の壁をぐるりと回るような半年先までのカレンダーを用意して帰省の写真を貼った。

その後、何年か後には、彼のカレンダーは、一ヶ月分だけで十分になる。もちろん彼にとって帰省や面会はなくてはならないものなのだが、おそらく、その後の彼には、家庭への電話のシールが一ヶ月のカレンダーの中に一枚含まれていれば、それで十分、安心になったのだろう。

スケジュールが必要なレベルはいろいろだ。日間の、個別的な、詳細なスケジュールが必要な方から、日間でも日課活動だけがあればいい人や一ヶ月のカレンダーがあればいいだけの人まで。

そして、その活用レベルも、A子さんやB子さん、そしてC男さんのように流動的だ。一度決まったスタイルが、いつまでも永遠に続くわけではないのだ。

もちろん、自閉症の障がい特性として、時間の組織化（時間の見通しを立てることが苦手）の障がいは現前として存在する。しかし、それは外界への信頼度が増すにしたがって、暮らし全体への安心度が高まることで、軽減していくように見える。

事業所で言えば、日間のスケジュール通りに日課が進んでいくさま、予定通りの職員の動き、個別的な楽しみが間違いなく届く実践…等々が、この世界は「信じるに足る」を彼らに注ぎ込み続けているのだろうと思う。

人は「信じるに足る」世界に暮らすと、次第に、「ねばならない」の世界から、「ま！いいか」の世界に移住していくような…。マスト（must）からファジー（fuzzy）への移行である。

少々のイレギュラーでも、少々の不確かさでも、「ま！いいか」で暮らせるようになることが、発達障がいは（適切な支援さえあれば）発達するの一つの真意であると思う。